

## 高齢過疎地域における人々のつながりに関する研究

A Study on the Human Networks in the Aging and Depopulated Area

古川恵子\*・本間俊雄\*\*  
Keiko Furukawa, Toshio Honma

\*鹿児島女子短期大学      \*\*鹿児島大学

抄録：高齢過疎化が進展する状況下で、地域居住のシステムをその地域の特性の中で作り上げていく必要がある。地方都市から通勤圏内にある地域を調査対象地とし、20歳以上の住民を対象に個別聞き取り調査を行い、集落内、集落間、地域全体の人々のつながりの現状を把握し分析した結果、地域に広がりのあるつながりと、小規模でまとまり、他とのつながりがなく閉じている活動グループがあり、つながりの拡大と情報伝達における課題が明らかになった。また住民の意見に、年中行事やイベントが多いという現状に対する消極的な意見と、肯定的に捉えてより多くの若者の参加を望む声が混在しているということを含めて、今後のまちづくりや緊急時の連携に向けた人的配置や組織連携に関する知見を得られた。

**Key words**：高齢過疎地域、地域居住、人々のつながり

### 1. はじめに

高齢過疎地域の人々の生活の継続性については、人口減少・縮小経済のもとで、自治体の公助と共に地域住民の互助、共助で担わざるをえない状況にある。地域包括ケアシステム構築の施策にも互助が明確に示されており、また、住み慣れた地域での生活の継続を多くの人が強く望んでいる。身体が虚弱化したときにも「自宅に留まりたい」と「改築の上自宅に留まりたい」とする人が60歳以上の全体の約2/3を占めることもその表れといえる<sup>1)</sup>。地域居住のシステムをその地域の特性の中で作り上げていく必要がある。

### 2. 研究の目的と方法

本研究は、地方都市の通勤圏内にある高齢過疎地域における集落内・集落間・地域全体の人々のつながりの現状を、個別聞き取り調査により明らかにし、まちづくりや緊急時の連携に向けた知見を得ることを目的としたものである。

調査対象地域は、地方都市から自動車で約40分の通勤圏内に位置し、経年変化が小さいと想定される山あいの地域Dにあるすでに高齢過疎の集落とその過程にある大小12の集落である。地域Dの人口は495名（男性236名、女性259名）、世帯数は256戸で、その内成人が412名である。全世帯は地域Dの中心地より半径3.3 km以内に位置している。

調査は、2012年8月から2013年8月までの期間に20歳以上の人々を対象に戸別訪問し、同一世帯でも20歳以上すべ

てに個別聞き取り調査を行った。

地域Dの高齢化率は62.9%で、鹿児島県の平均値27.0%<sup>2)</sup>より高い。地域Dの集落別人口、世帯数、高齢化率を表1に示す。人口、高齢化率においては、集落ごとに特徴が見られる。

### 3. 結果

#### 1. 地域Dの回答者の概要

回答者は322名で回答率は78.2%であった。ただし、個人間のつながりに関する質問に対して、回答者から名前の挙がった未回答者の地域内出現者を合わせると9割以上の住民間ネットワークの把握ができた。調査集落の回答者数および年齢層は表2の通りである。回答者321名中、年齢不明1名を除き、65歳以上の高齢者は55.3%で、75歳以上の後期高齢者は39.7%である。

居住年数が50年以上の人が半数いる。0~9年が17%、10~19年が12%、20~29年が13%、30~39年が4%、40~49年が4%である。

職業は無職が56%、会社員・公務員が21%、商店や大工などが13%である。

居住形態は、単独世帯が26%で、その内、高齢者が22%である。

世帯構成は、高齢夫婦が19%、2世代が36%、3世代が8%である。

表1 地域・集落人口と高齢化率

	地域D全体	集落A	集落B	集落C	集落D	集落E	集落F	集落G	集落H	集落I	集落J	集落K	集落L
集落人口(住民登録者数)	495	97	146	82	13	21	52	28	11	8	16	4	17
男(人)	236	45	77	34	8	10	26	11	5	4	7	2	7
女(人)	259	52	69	48	5	11	26	17	6	4	9	2	10
世帯数	256	52	58	38	9	16	27	16	9	6	1	3	11
高齢化率(%)	62.9	47.4	16.4	46.3	46.2	81.0	61.5	75.0	72.7	62.5	81.3	100.0	64.7

表2 調査の回答者数と未回答者の内訳

	地域D全体	集落A	集落B	集落C	集落D	集落E	集落F	集落G	集落H	集落I	集落J	集落K	集落L	
回答率(%)	78.2	77.9	74.8	73.4	84.6	89.5	75.0	85.2	85.7	87.5	92.9	80.0	78.6	
成人人口(人)	412	86	119	64	13	19	36	27	7	8	14	5	14	
回答者	回答者数	322	67	89	47	11	17	27	23	6	7	13	4	11
	畑・別荘として使う	7	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	1
未回答者	畑だけ・別荘として使う	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0
	拒否	18	4	8	2	0	0	2	2	0	0	0	0	0
	仕事等で不在がち	52	8	19	14	2	1	4	0	0	1	1	0	2
	体調不良・難聴で調査不可	11	3	3	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0
回答者の年齢	入院中	6	3	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
	20歳～	12	3	4	3	0	0	2	0	0	0	0	0	0
	30歳～	19	4	12	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	40歳～	30	1	22	0	0	0	3	3	0	1	0	0	0
	50歳～	49	16	14	9	1	3	4	0	1	0	1	0	0
	60歳～	33	9	12	5	1	0	2	1	0	0	0	0	3
	65歳～	50	10	15	8	0	1	0	10	3	3	0	0	0
	75歳～	127	24	9	21	8	13	16	9	2	2	12	4	7
不明	1		1											

## 2. 地域Dの概要

2013年3月に小学校Dが閉校し、現在地域内に小学校はない。中学校は地域外の町内に1校である。2012年4月28日に、NPO法人Mが運営する地域D内で採れる山菜や野菜等の特産品を販売する「Dふれあい館」が開館した。地域Dを構成する12集落を集落A-Lと表記する。地域の主要道路となる県道が、集落A、B、C、Dを横切る。この地域では、県道沿いの集落B、Dと山間部の集落E-Lに分けられる。集落A、Cは、県道沿いの住戸と山間部の住戸の両方を含む集落である。最も山深いところに集落Kがある。

## 3. 日常の活動と組織

地域づくりに向けた地域Dの住民の要望には、より多くの若い方の積極的な参加を望む声と、年中行事やイベントが多いという消極的な意見が混在していた。組織運営については、ボトムアップ型の方法を望む意見が多数みられた。

現在の地域D内の集まりや活動を表3に示す。地域内外で行われている活動は、元気づくり委員会、消防団、高齢者学級である。地域内の集落をまたいで行われている活動には、老人会、グランドゴルフ、NPO法人主催のおしゃべりサロンNがある。

おしゃべりサロンNの活動は、集落Eの集会所で毎週水曜日の10:00-15:00に行われ、集落Eの住人の他に、集落A、Cからも人数の上限はあるものの車での送迎付きで参加し

ている。地域外の元体育教師の指導のもと、地元の唄を歌ったり、手と頭の体操をしたり、足を使った軽い運動も行う。昼食には、地域外の参加者で料理上手な方が作った食事や持ち寄った漬物、お菓子等が準備され、和やかな雰囲気の中で話しながらいただいていた。おしゃべりサロン終了時にはNPO法人Mによる出張商店が開かれ、参加者はそれぞれ一週間分の買い物をする。購買施設が近隣にない高齢者にとって、貴重な機会となっている。

グランドゴルフは地域内の二つの小学校区の小学校跡地で行われている。D校区では月に2回、S校区では週に2回の開催である。

各集落では、自治会の草刈りや会合が定期化されている。2013年4月から、集落Cで伝統的な盆踊りを伝承する集まりがあり、婦人会のような会になっている。参加者の中で移動手段のない高齢者を、集落内の若い人が車で送迎している。他に、集落内の小さな集まりではあるが、班でバーベキュー会や呑み会等が行われている。なお、以前あった婦人会、子ども会、PTAは現在はない。

緊急時の組織は、集落Aのみが自主防災組織図を作成しており、その組織は図1のとおりである。集落B-Lでは、自主防災組織を有していないが、避難時に援護が必要と予想される人に対して、それぞれ見守り担当が設定されている。地域Dの避難所は、D消防コミュニティセンター、Nコミュニティ消防センター、D地区公民館の3箇所に設定

表3 各集落の活動状況

	活動ya	活動範囲	頻度	参加者数	備考
地域内外	元気づくり委員会	地域D内外	数回/月	約45人	
	消防団	地域D内外	2回/月	約30人	
	高齢者学級	地域D内外	1回/月		
地域内の集落内外	老人会	地域D内	2回/年		
	グランドゴルフ(元S校区)	集落I-L	2回/週	約13人	水・土曜日/週
	グランドゴルフ(元D校区)	集落A-H	2回/月	約10人	第1・第3土曜日
	おしゃべりサロンN	集落E(A, C)	1回/週	約20人	他集落からの参加人数に上限設定。NPO主催。2002年～
	各自治会の草払い	各自治会	数回/年	世帯数	
	自治会の会合	集落E	1回/週	世帯数	
	自治会の会合	集落E, F以外	数回/年	世帯数	
	自治会の会合	集落F	1回/年	世帯数	回覧板は1回/月(他の集落は1回/週)
	盆踊り伝承の会	集落C	2回/月	約14人	第2・第4月曜日(コスモス会)、2013年4月～

されている(いずれの名称もM市のHPによる)<sup>3)</sup>。

#### 4. 地域づくりに向けた住民の要望

「地域Dが今後どのようなになったらよいか」についての回答には、若い人がもっと手伝ってくれたら良い、人家が増えると良い、若い人が増えると良い等の地域を活性化したい意見と、年中行事やイベントが多く、駆り出されるといった、のんびりした田舎暮らしを望むことが伺える意見がある。両者には大きな隔りがあるが、両者を包含するような地域づくりが望まれる。また、皆の話し合いのもとで物事を決め地域づくりをしようという意見が多くあった。

#### 5. 集落の特性

##### (1) 集落A

地域のリーダーとなれる人が多い集落である。地域行事に対する意見が二極化していることが伺えることから、積極的な話し合いの場を設ける必要があると考える。また集落は8班で構成され、それぞれ班内においては近所づきあいが密になされている。今後、班の間の結びつきが地域の活性化に重要になると思われる。

##### (2) 集落B

居住年数が短い人が多く、人々のつながりは形成段階にある。つきあいの内容において、地縁や血縁以外によるつながりの割合が大きい。お酒を飲んだり、食べたりするのが好きな人が多く、地域外の人を受け入れる雰囲気がある。花見や呑み会など現状の集まりを続ければ、つながりが広がると考えられる。公営住宅居住者と地域の人々とのつながりを築く何らかの方策が必要と思われる。

##### (3) 集落C

昔ながらの、伝統的な踊りを伝承しようという集まりがある。会は平日の昼間に行われ、主婦を中心に集まっており、結果的に昔の婦人会のような会が形成されつつある。参加者は車での送迎により集合しており、住戸間距離が離れている集落の集会では、このような送迎のサポートを確

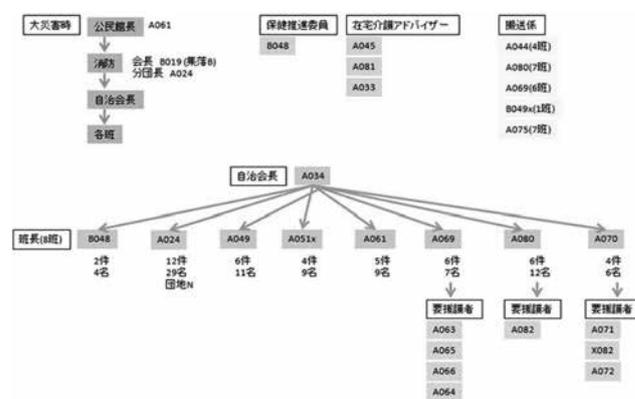


図1 地域Dの集落Aの自治会作成の自主防災組織図

立する必要がある。

##### (4) 集落D

地理的に住戸間距離が離れており集落内での互助は容易でなく、必要なとき個別に集落外部からのサービスを提供することが必要である。

##### (5) 集落E

昔からのつきあい、週に1回のおしゃべり会、最近はUターン者数人の地域イベント開催などがあり、このようなつきあいを基本とした成熟したネットワークを形成している。これに加えて、NPOによる大学生のボランティア活動を受け入れており、外部の人を許容した活性化の進んでいる集落である。

##### (6) 集落F

集落内の人々とのつながりはあるものの、密なまとまりの多層性が小さい集落である。住戸間距離が離れていることと、かつて地域の商いの中心地であることが特徴で、個人的に親しい友人関係にある人はごくわずかであった。

##### (7) 集落G

身体的なサポートが必要な方が多いが、おすそ分け等近所づきあいが頻繁になされている。集団規模と集落単位が

一致しており、集落外との関係が薄い。集落間の活動を促すよりは、他集落との連携の仕組みを考える必要がある。

(8) 集落 H

7名の集落で、住民自ら限界集落だと認識している。確かに、全世帯独居で高齢者が多く、森林や田畑の手入れが行き届いておらず、集落としての機能も低下している。しかしながら、個々の住民は非常に元気で、各自自給自足に近い生活を送っている。話し相手がほしいという意見が半数あったのでそれに応じる活動が望まれる。

(9) 集落 I

8名の集落で、隣接する集落 J との関係が密である。各人がそれぞれの生き方をしており、互いに干渉することはない。

(10) 集落 J

グラウンドゴルフが活発な集落である。元小学校区のメンバーで行動を共にしてきており、他の人にとっては入りにくいと思われる。しかし、別荘として住む人も現れていて、豊かな自然環境をアピールした空き家活用による活性化が考えられる。

(11) 集落 K

5名からなる集落で、それぞれ独居高齢者であり、地域外に居住することもや親戚とのつながりが主である。親族がよくサポートしていて、孤独を感じている人はいないようである。しかし、見守り・サポートを確立させる必要があると思われる。

(12) 集落 L

豪雨による大災害の経験を持ち、防災への意識が高い集落である。

多くの人が避難した場所で災害に遭遇したため、避難場所の設定以前に災害時の連絡態勢の強化を強く求めている。日常生活では、移動手段にコミュニティバスを利用する人が比較的多い。運行経路と運行時間帯の改善を望む人が多い。

6. 人々のつながり、外出状況

表4に示すように、地域 D は血縁関係が多い。隣近所につきあいは2/3があげており、自治会や地域活動、回覧板を回す等も1/3が行っている。見守りの関係にある人も1/4、子ども等との関係でつながりがある人は1/10いることがわかる。その他お茶飲み、呑み友達等々があげられている。人々のつながり・つきあいを①心理的サポート [世間話をする、趣味を通じてのつながり、お茶飲み仲間]、②身体的サポート [荷物運び、ゴミ捨て、力仕事や田畑の手伝い、冠婚葬祭の手伝い、自動車での送迎、買い物等の代行、看病等の世話]、③悩み相談、④緊急時に手助けを求められるという4項目に分類した。地域 D 全体の人々のつながりを地区外の人とのつながりも含め図2aに示し、つながりの中の身体的サポート、悩み相談、緊急時についての関係を図2bから図2dに示す。また、一例として、集落 A の人々のつながりを図3aから図3dに示す。図中の点で表されるのが、回答者や回答者がつながりのあるとしている人で、直線はつながりを表す。表4と図3a～dにみられるように各集落とも①、②はこの順番でつきあいが比較的多くなされ、③、④の順でつながりがあることがわかった。悩みを相談できる関係のある人は各集落とも多いが、緊急時に手助けを求められる人がいるという回答者は多くない。また、緊急時に手助けを求められる人が0である集落が3あ

表4 各集落の人々のつながりの内容

	地域D全体	集落A	集落B	集落C	集落D	集落E	集落F	集落G	集落H	集落I	集落J	集落K	集落L
成人人口 (人)	412	86	119	64	13	19	36	27	7	8	14	5	14
回答者数 (人)	322	67	89	47	11	17	27	23	6	7	13	4	11
1-1 夫婦	88	21	32	13	3	1	6	6	0	0	3	1	2
1-2 親子	90	15	32	19	2	5	7	6	0	2	0	0	2
1-3 兄弟・姉妹	12	3	4	2	0	0	2	0	0	0	1	0	0
1-4 親戚	53	11	11	12	1	4	2	6	3	0	3	0	0
2-1 隣近所つきあい	222	72	51	19	1	7	17	27	3	4	8	2	11
2-2 見守り/見守りの協力	80	13	14	18	2	9	6	3	2	0	2	0	11
2-3 自治会/地域活動/回覧板	102	8	34	32	4	8	6	5	3	2	0	0	2
2-4 地区役員	5	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3-1 幼なじみ/学友	27	8	5	1	2	3	2	4	0	0	0	2	0
3-2 お茶飲み/呑み友達	24	13	10	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3-3 趣味	16	1	3	3	0	6	0	0	0	2	1	0	0
3-4 仕事場	22	6	3	1	0	0	2	0	0	0	7	3	0
3-5 消防団	12	1	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3-6 お店と客	16	0	5	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3-7 子ども等とのつながり	32	5	26	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
4-1 血縁関係	252	50	79	46	15	10	17	18	3	2	7	1	4
4-2 地縁関係	411	96	101	69	7	24	29	35	8	6	10	2	24
4-3 その他の関係	149	34	63	17	2	9	4	4	0	3	8	5	0
5-1 悩みを相談できる関係 (人)	242	48	75	41	5	10	16	22	2	5	12	2	4
5-2 緊急時に手助けを求められる関係 (人)	60	16	14	8	0	6	4	6	0	2	2	0	2

高齢過疎地域における人々のつながりに関する研究

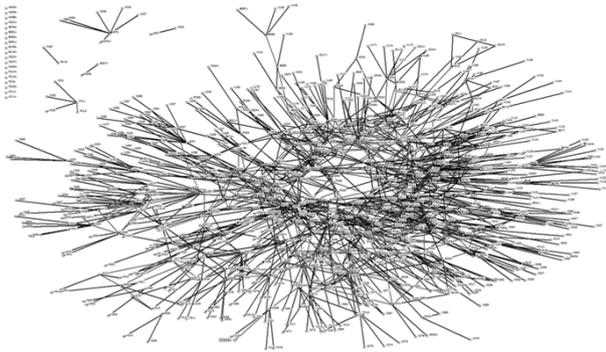


図2a 地域Dの人々の全部のつながり

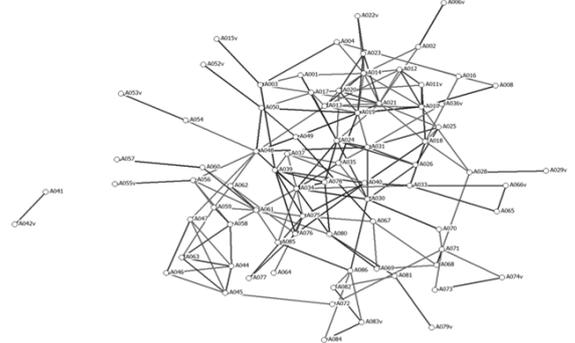


図3a 集落Aの心理的サポート

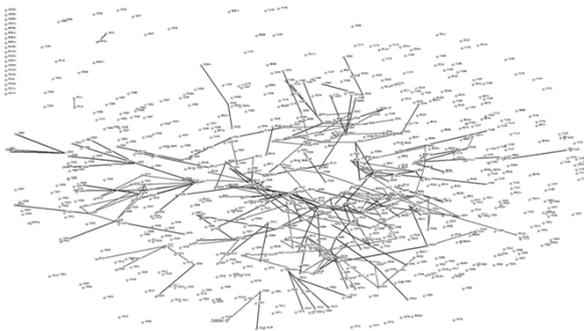


図2b 地域D全体の身体的サポート(頻度:週に1回以上)

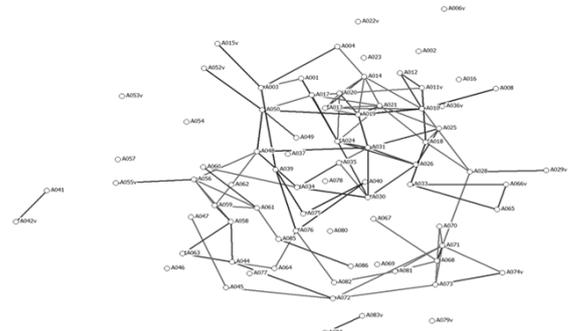


図3b 集落Aの身体的サポート



図2c 地域D全体の悩みを相談できる関係(地区外も含む)

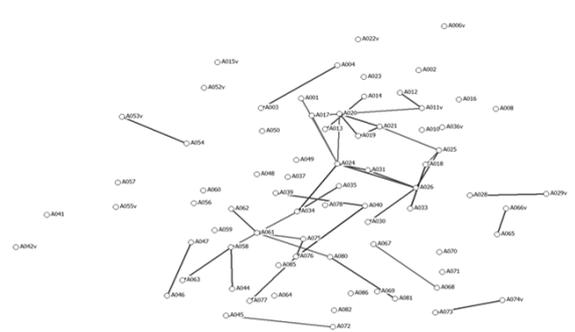


図3c 集落Aの悩みを相談できる関係



図2d 地域D全体の緊急時の手助けを求められる関係(地区外も含む)

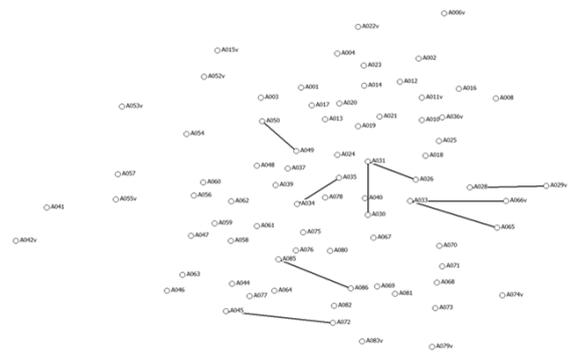


図3d 集落Aの緊急時の手助けを求められる関係

ることが表4に示されている。理由は、集落に公民館がなく、設定されている避難所が徒歩で1時間の場所にあり、他の避難場所や集まる場所が分からない現状が一因と考えられる。

外出頻度は、ほぼ毎日が70%、一週間に3～4回が14%、一週間に1～2回が12%、ほとんど外出しないが4%である。外出に自動車を運転する人が63%、次いで自動車に同乗する人が17%、徒歩が11%、自転車・バイクが6%、バスが3%である。自転車に乗っている成人は皆無である。

## 4. まとめと考察

### 1. 人的配置

各集落の自治会長が集落内の住民について把握している状況は、表5に示すように3つに分類できる。いろいろな組織・活動のグループの最大構成人数は20人未満であったことから、相互に顔が見え、一人が把握できる人数には個人差があることを考慮して、25名前後と言えよう。1名の人員（役員や係）を配置するのに効率的な人数として参考になる。

12集落のうち9集落においてキーパーソンは自治会長経験者であった。自治会長を担当することで集落のことを知る機会を得る。ただし、自治会長の負担が大きいという意見もある。たとえば、災害時に2か所の避難所の鍵を開け、連絡も担うことになっている集落があり、明らかに一人では負担が大きい。人数が多い集落では、集落のことを知る自治会長に加えて副自治会長を立てると共に、任期を考えてセーフティネットワークを作る必要があるだろう。

表5 集落ごとの自治会長の集落住民把握状況

自治会長の集落住民把握状況	集 落
1. 把握している	D、E、H～L
2. 一部把握	F、G
3. 把握できていない	A、B、C

### 2. 新規参入者の受け入れ

居住年数が短い人は、同じ時期に近所に転入してきた人同士のつながりを構成していることから、まず同時期に引っ越ししてきた人同士で顔を合わせ、話す機会・場を作ること、さらに地域との繋がりを深める機会を設けることが必要であると考えられる。

### 3. イベント協力者

地域内でイベントを開催するにあたり、協力者を募る、あるいは見学者の数を増やすには、多くの人とつながりのある人に伝えることが有効である。

### 4. 孤立者に関して

地域D全体の10%未満が孤立者であった。孤立者には、人とのつながりを求めている人、つながりを形成する段階にある人、高齢による友人の消失による人、地域内他集落や地域外につながりを持つ人等様々であった。

望んで孤立している人に関しては、干渉せず見守る体制を作ることが必要である。

### 5. 地域づくりのテーマについて

楽しみや生きがいを「地域行事よりも子どもや孫、友人に会うこと」や「農作業や花の手入れ」などの日常的なことと回答した人が極めて多かった。今まで地域Dでは、地域行事をベースに活動を促進してきたが、地域行事を全年齢層で再検討する必要があるだろう。なお、ピザ作りや出店等の新しい動きに参加者が多いことは参考になると考える。

### 6. 防災組織に関して

災害等の緊急時に連絡を取り合う際、正確な情報を末端まで早く伝達すべき場合には、理論上、現状のつながりにおいて、地域全体の中心にある人から集落全体の人のつながりが最も大きい人を介して集落内の各小さなつながりと多く関係のある人に伝え、末端に伝達すると効果的であると考えられる。ただし、孤立者や、孤立したグループには個別の対応が必要となる。

地域Dは、全域で見てもつながりの総数が少なく、2人のみの関係で完結するネットワーク構成も見られる。自力で避難すると答えた人も多数おり、集落Aでは、自主防災組織に基づいて行動すると回答した方が12人いたが、実際には搬送係（助ける側）に指定されている5人が昼間は集落外にいる現状であり、自主防災組織は緊急時に機能する可能性が低い。

緊急時に関しては、今後、人々の日常の接触頻度を考慮し、自主防災組織を結成するなど実状に応じた組織を編成する必要がある。

地域内の小さなまとまりを繋いでいる地区役員は、グループ間や各活動間を繋ぐ役割を担っている。役員でない人々は、地域全体の活動や緊急時にも機能するような関係形成と維持を図っている。今後、現状の相互連携を進展させることがさらに重要になると言える。

2年間に亘る本調査を、探究心と忍耐力から精力的に中心となって行ってくださった鹿児島大学大学院理工学研究科建築学専攻生の古賀奈津美さんはじめ、建築学科の学生さんたち、本学生生活福祉専攻の学生さんたちと、調査にご協力いただきました地域の皆様に心よりお礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 平成26年版高齢社会白書 p 39
- 2) 平成25年版高齢社会白書 (全体版)
- 3) M市ホームページ/2014.10.10 <http://www.city.minamisatsuma.lg.jp/about/shihou/pdf/200907/P20090706.pdf#search=%E5%8D%97%E3%81%95%E3%81%A4%E3%81%BE%E5%B8%82%E9%81%BF%E9%9B%A3%E6%89%80>
- 4) 古賀菜津美, 古川恵子, 本間俊雄, 友清貴和: グラフ理論を用いた地域住民間のネットワーク解析 —過疎・高齢地域における三集落の特性記述—, 日本建築学会九州支部研究報告, 日本建築学会研究報告 九州支部 第53号・3 計画系, pp193-196,2014.3
- 5) 古賀菜津美, 古川恵子, 境野健太郎, 本間俊雄, 友清貴和: グラフ理論を用いた地域コミュニティの構造解析—過疎・高齢地域Dの人的ネットワーク—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (近畿) 建築計画, pp927-928,2014.9
- 6) 古川恵子, 友清貴和: 高齢・過疎地域における高齢者の生活を支えるつきあいの広がりに関する研究, 日本建築学会計画系論文集 第568号, pp77-84,2003.6

(平成27年1月28日 受理)